

国語科の学習における主体的に学習に取り組む態度を育成する 振り返り指導のあり方

How to Set Instruction of Reflection that Cultivate the Attitude to Take the Initiative in Studying in Japanese Language Learning

北村凌^{※1}

※1 和歌山市立伏虎義務教育学校 わかやま子ども学総合研究センター特別研究員

本稿では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法が未だに明確とは言い難く、また、「主体的に学習に取り組む態度」の育成ができていない国語科の授業の評価を問題として取り上げつつ、振り返りを評価の材料とすることがその課題解決に有効であることについて考察した。その際、学習者に行ったアンケートから学習者が質の高い振り返りができるようにするためにはどのような指導が必要であるかについて、現段階における意見を述べた。

キーワード：国語科、主体的、振り返り、振り返り指導、評価

1 問題の所在と目的

中学校学習指導要領（以下、指導要領）が平成29年に改訂され、従前の指導要領における「関心・意欲・態度」の観点から「主体的に学習に取り組む態度」として改めて示された。しかし、この両者は趣旨を異にするものではなく、「主体的に学習に取り組む態度」は各教科の学習内容に関心をもつことだけでなく、よりよく学ぼうとする意欲をもって学習に取り組む態度を評価するという趣旨を改めて強調するものである。

しかし、未だによりよく学ぼうとする意欲を持って学習に取り組む態度を適切に評価することができていないのではないだろうか。それは、ノートや学習ワーク類の提出や授業での発言回数や態度を材料にし、板書をすべて写しているか、問題を全て解いて答え合わせをしているかなどによって判断していることが多いのが現状だからである。ノートを丁寧に書き写すことや定められた期限内にワークを提出することも学ぶ意欲の表れの一つであることは否定しないが、あまりにも一面的であり、よりよく学

ぼうとする意欲を持っていることを評価するものとしては不十分であると考えられる。

では、なぜそのような現状なのか。それは、評価の視点が明らかにされていないことがその一因だと考えられる。令和2年3月に国立教育政策研究所教育課程研究センターから出された「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 国語】（以下、学習評価に関する参考資料）に「具体的な評価の方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や児童学習者による自己評価や相互評価等の状況を、教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられる」として何を評価の材料にするかは例示されている。しかし、それらを用いてよりよく学ぼうとする意欲を持って学習に取り組んでいるかどうかをどのように判断し、評価していくかという方法を明らかにしなければ実際に評価することは難しい。

また、私たちは学習者の「主体的に学習に取り組む態度」を評価するだけでは不十分であり、それを育成していく必要がある。私たちの目的は「主体的に学習に取り組む態度」を評価することではなく、評価することを通して「主体的

に学習に取り組む態度」を育てていくことである。しかし、評価の方法が明確でないこともあり、育成することができているとは言い難いのが現状である。

そこで、以上の問題意識を踏まえ本稿では、「主体的に学習に取り組む態度」を評価していく材料として振り返りを取り入れることで、評価の方法を明確にし、さらに「主体的に学習に取り組む態度」を育成することができるのではないかについて、考察を進めていきたい。

また、どのようにすれば学習者が質の高い振り返りを書くことができるようになるのかについても学習者に行ったアンケートの結果から考察を加えたい。

2 振り返りについて

本節では、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する材料として振り返りを取り入れることが、評価の方法を明確にし、「主体的に学習に取り組む態度」を育成することにつながるのではないかについて考察する。そのためには、まず、質の高い振り返りとはどのような振り返りかを明らかにしておく必要がある。したがって、本節では、先行研究をもとに質の高い振り返りのあり方について明らかにしたうえで、振り返りを材料にしてどのように「主体的に学習に取り組む態度」を評価していくかを具体化し、振り返りが「主体的に学習に取り組む態度」を育成していくことに適切である理由を論じる。

2.1 質の高い振り返りとは

そもそも質の高い振り返りとはどのような振り返りなのだろうか。先行研究をもとに考えてみる。ここでは、生井・中島・山下 (2019) と梶浦 (2022) 増見 (2022) を参考に考えてみる。

まず、生井・中島・山下は、質の高い振り返りについて、『能動的実験・具体的経験』と『内省的観察・抽象的概念化』がしっかりと噛み合ったところに生じるもの」と述べている。(生井・中島・山下 2019 p.3) これを国語科の学習に照らし合わせて考えてみると、言語活動という「能動的実験・具体的経験」を通して「内省的観察・抽象的概念化」、つまり、自分の内面を観察して体系的に整理することが質の高い振り返りであると言える。単に「～に取り組んだ」

「～を学習した」にとどまらず、言語活動に取り組むことによって自己の内面に表れた変化や気づきなどを観察し、体系的に整理することが必要であると分かる。このことから、言語活動を通して振り返ることの重要性を改めて理解することができる。

しかし、これだけではどのような変化や気づきがあれば質の高い振り返りと言えるのかははっきりしていない。次に、梶浦 (2022) と増見 (2022) から、どのような内容であれば質の高い振り返りと言えるのかを考えてみる。

まず、梶浦は、振り返りにおいて以下の三つの要素が大切であると述べている (梶浦 2022 p.38)。

① Relative (関連性)

「知の関連性を見出す」

② Refine (洗練)

「知識をより洗練させる」

③ Rebuild (修正)

「知識を修正し、上書きして再学習をする」

それに対して、増見は振り返りの評価観点として、「自らの学びの経験」「見通し」「設定した目標の振り返り」の三つを挙げ、単元途中では「自らの経験、あるいは自己の変容を自覚的に捉え、描写し、これから先にどのようなことをすればいいのかという計画を立てている」かどうか、単元の終末では「自己の経験、あるいは自己の変容を自覚的に捉え描写しながら、目標がどれだけ達成できたかを振り返り、自身の不足している部分等の課題を分析している」のかを評価するとしている (増見 2022 p.24)。

両者に共通するのは変容を重視していることである。梶浦 (2022) では変容の種類が具体的に挙げられており、増見 (2022) においては自己の変容の前後にも着目している。どのようなことをすればよいかを考えて課題に取り組んだ結果できるようになった変容を捉えたうえで、変容後の課題分析も行っているが、これは単元を通じて行う振り返りを想定していることによる影響が大きいと考えられる。また、ここには単元の前後で同じ、あるいは同様の課題を提示することができるという英語科の特徴が生かされている。

そして、パフォーマンス課題を取り入れていることによって、増見では「自らの学びの経験」を振り返らせていることに注目したい。具体的にはパフォーマンス課題に取り組んだ瞬間の気持ち(思っていたよりできなかった/できたなど)を書かせている。(増見 2022 p.24) つまり、パフォ

パフォーマンス課題への取り組み自体に関する振り返りをさせているのである。

今までの振り返りでは、梶浦 (2022) で挙げられているようにわかったことや気づいたことなどの知識の変容、もしくははできるようになったことを振り返ることが多かった。その一方で、どのような態度で活動に取り組んだのかという活動への取り組み自体を振り返ることはあまりできていなかった。国語科においても同様である。もちろんわかったことやできるようになったことを振り返ることも自己の変容や学びを自覚するという点で非常に重要なものである。しかし、これでは言語活動を通して身に付けたものは何か、できるようになったことは何か、つまり、学びの結果に目を向けた振り返りにしかなっておらず、学びの過程には全く目が向けられていない。過程に目を向けていたとしても「～に取り組んだことで〇〇ができるようになった」のように、どのようなことに取り組んだかを振り返っていた程度である。育成すべき資質・能力の定着を重視するあまり、振り返りにおいて、学びの過程に目を向けることが少なくなってしまうのではないだろうか。

そこで重要になってくるのが、増見 (2022) で示唆されたパフォーマンス課題への取り組み自体に関する振り返りである。増見 (2022) ではパフォーマンス課題に取り組んだ瞬間の気持ちを問うていたが、それだけでなく、課題に取り組む際にどのような見通しを持って課題に取り組んだのか、課題に取り組んだ際にどのように試行錯誤したのかなど、さらに課題に取り組んだ姿勢を振り返らせれば、学びの過程に着目した振り返りができると考えられる。

つまり、国語科の振り返りにおいても言語活動を通して身に付けた資質・能力に関する振り返りだけでなく、言語活動への取り組み自体に関する振り返りをさせることで、学びの過程とその結果学んだことやできるようになったことを振り返ることができ、より質の高い振り返りが可能になると考えられる。

これらを受け、国語科における質の高い振り返りには、言語活動を通して身に付けた資質・能力に関する振り返り（以下、資質・能力に関する振り返り）と言語活動への取り組み自体に関する振り返り（以下、言語活動に関する振り返り）の二種類が必要であると考えられる。そのための具体的な観点について、梶浦 (2022) と増見 (2022) を参考に次のようにまとめた。

資質・能力に関する振り返り

- ①実体験や既習事項などの過去や今後への生かし方などの未来との関連
- ②今までよりもできるようになったことへの自覚
- ③今までと現在を比べて変化・修正した考えや知識

言語活動に関する振り返り

- ①言語活動に取り組むまでの見通し
- ②言語活動に取り組んだ際の試行錯誤
- ③言語活動後に感じた成果や課題

以上の内容を満たしたものを本稿では質の高い振り返りとする。

2.2 振り返りを評価する方法

では、振り返りを材料にしてどのように「主体的に学習に取り組む態度」を評価していけばよいのか。

まず、それを明らかにする前に、振り返りが「主体的に学習に取り組む態度」を評価する材料として適切であるかについて論じる。

先述したように、「主体的に学習に取り組む態度」とはよりよく学ぼうとする意欲をもって学習に取り組む態度のことである。では、その「主体的」な姿とは具体的にどのような姿のことだと言えるか。本稿では、北村 (2022) でまとめた「粘り強さ」「自己決定」「自己調整」を主体的な姿の三つのキーワードとする。

ここでは前節でまとめた質の高い振り返りにおける言語活動に関する振り返りに着目する。主体的な姿は言語活動に取り組む際に最も表れるものだからである。言語活動に関する振り返りではその具体的な観点として、①言語活動に取り組むまでの見通し、②言語活動に取り組んだ際の試行錯誤、③言語活動後に感じた成果や課題を挙げた。これらが主体的な姿の要素を備えているかを確認するため、さらに具体化してみる。

①言語活動に取り組むまでの見通しとは、今までの学習が生かせるかを考えたり、どのようにすれば言語活動のゴールを達成することができるかを考えたりするなど、どのような見通しを持って言語活動に取り組んだかを振り返ることである。これは、まさに主体的な姿の「自己調整」と関連していると言える。

②言語活動に取り組んだ際の試行錯誤は、言語活動に取

り組む際に難しさを感じた場面でどのようにして解決しようとしたか、また、悩んだ場面においてどのような判断をすることに決めたかを振り返ることである。ここには、難しさや悩みに直面しても諦めずに方法を考えて解決しようとする「粘り強さ」が関連し、さらに、自分でどのような決定を下したかという「自己決定」の要素も含まれている。

③言語活動後に感じた成果や課題は、自分が達成できたと感じていることやまだ達成できていないことや今後に残されている課題を振り返り、どのようにすればよかったかを考えることである。これは主体的な姿の三つのキーワードと関連してはいない。しかし、「主体的に学習に取り組む態度」の下敷きとなっているものは「学びに向かう力、人間性」である。現状の課題を分析し、どのようにすればよかったかを考えることは今後の学びにつながるものであり、これを次の学びに向かう力と捉えれば、「主体的に学習に取り組む態度」と全くの無関係とは言えないだろう。

このように考えると、①言語活動に取り組むまでの見通しと②言語活動に取り組んだ際の試行錯誤が主体的な姿のキーワードを満たしており、③言語活動後に感じた成果や課題もやや関連する部分があることがわかる。

ここで、さらに確認しておきたいことは資質・能力に関する振り返りと「主体的に学習に取り組む態度」の関連である。資質・能力に関する振り返りはわかったことやできるようになったことに関する振り返りである。これは一見「主体的に学習に取り組む態度」に関連があるものとは思えない。しかし、何がわかったか、何ができるようになったのか、何がどのように修正されたのかを自覚し、言語化できなければ次の学習に生かすことは難しいことを踏まえると、言語化することは学びを次に生かすための重要な活動だと言えるだろう。つまり、資質・能力に関する振り返りも「主体的に学習に取り組む態度」と関連があるものだと結論づけられる。

よって、振り返りが「主体的に学習に取り組む態度」を評価する材料として適切であると判断できる。

続いて、振り返りを材料にして「主体的に学習に取り組む態度」を評価する方法の具体化を図る。

増見(2022)では振り返り評価ルーブリックを用いて振り返りを評価している。本稿においても、ルーブリックを用いた評価方法を採用する。それは、振り返りを評価するには段階があると考えたからである。

ここまで、言語活動に関する振り返りと資質・能力に関する振り返りが「主体的に学習に取り組む態度」に関連するものだと述べてきたが、あくまでも土台となるのは言語活動に関する振り返りである。資質・能力に関する振り返りはあくまでも言語活動を通してわかったことやできるようになったことだからだ。よって、評価基準も言語活動に関する振り返りができていればB評価とし、そのうえで資質・能力に関する振り返りができていればA評価とする。基準を具体的に言葉で表現すると次のようになる。

A：見通しを持って言語活動に取り組み、その際に試行錯誤したことについて振り返ることができており、言語活動を通して何が分かったのか、どのようにすればできたのか、何がどう修正されたのかが具体的に言語化されている。

B：見通しを持って言語活動に取り組み、その際に試行錯誤したことについて振り返ることができているが、言語活動を通して何がわかったのか、どのようにすればできたのか、何がどう修正されたのかが具体的に言語化されていない。

C：見通しを持って言語活動に取り組み、その際に試行錯誤したことについて振り返ることができていない。

これが、本稿が具体化した振り返りを材料として「主体的に学習に取り組む態度」を評価する方法である。なお、Bの基準において、今回行った実践は言語活動に関する振り返りの中で主体的な姿のキーワードとの関連がはっきりしている二観点を優先し、③言語活動後に感じた成果や課題は扱わなかったことを補足しておく。

2.3 「主体的に学習に取り組む態度」を育成できるか

本節では、振り返りを評価の材料とすることは「主体的に学習に取り組む態度」を育成することに有効であるのかについて述べる。

振り返りは「主体的に学習に取り組む態度」との関連があることから、評価することに適切な材料であることはこれまで述べてきた通りである。関連があるということ、つまり、学習者が質の高い振り返りを書くことができるようになれば、それは学習者の「主体的に学習に取り組む態度」が向上したと判断でき、振り返りは「主体的に学習に取り組む態度」の育成に有効であると言える。

では、学習者が質の高い振り返りを書くことができるよ

うにするために、指導者にはどのような指導が必要であるのか。次節以降では、稿者の実践をもとに、どのように指導すれば学習者が質の高い振り返りを書くことができるのかについて考察を進めたい。

3 振り返り指導

本節では、学習者が質の高い振り返りを書くことができるようになるためには指導者はどのような指導をするべきかについて考察する。まず、今年度当初の稿者の振り返り指導がどのようなものであったか、また、その際に感じていた課題を述べる。それを受け、稿者が学習者に行ったアンケートの結果から学習者が振り返りについてどのような考えを持っているかを抽出したうえで、その後に行った振り返り指導から、学習者が質の高い振り返りを書くことができるようになるために指導者が行う振り返り指導の在り方について考察する。

3.1 振り返り指導初期の実態と課題

今年度当初、学習者に振り返りを書かせる際には「今回の単元の学習においてわかったことや気づいたこと、学んだことについて書きなさい」と指示していただけであった。観点を設けずに書かせることによって、自由に自分の学びを振り返ることができると考えていたこと、また、その状態であっても適切な振り返りができることこそ振り返りの力があると判断できると考えていたためである。しかし、この考えはむしろ、学習者を混乱させることになった。質の高い振り返りができる学習者はほとんどおらず、的外れな内容であったり抽象的な内容であったりするものばかりになってしまったのである。そこで、稿者は次の二つの方法をとった。

一つは、評価のフィードバックを返すだけでなく、良い評価をした振り返りをモデルとして配布したことである。良いと判断した振り返りの優れた部分に線を引き、学習者に配布し、何が良いのかを問うなどして、良い振り返りのイメージを持たせることをねらった。

もう一つは、フィードバックにおいて、特に具体的に書いてほしいところや振り返ってほしい視点についてコメントを返し、再提出を認めたことである。これによって、一

度目よりも具体的に、振り返るべき項目について振り返ることができると思ったからである。

この二つの方法を取り入れた結果、当初よりも質の高い振り返りができるようになった学習者は増えた。しかし、全体としては、依然質の高い振り返りは少なかった。

3.2 学習者に行ったアンケート

どのように働きかければ学習者の振り返りの質が高まるのかを考えるため、学習者が振り返りについてどのような考えを持っているのかを確かめるべく、アンケートを行った(図1)。実施対象は中学3年生の学習者62名である。

振り返りについてのアンケート

番 名前 ()

今年度、振り返りをよく書いてもらいました。
振り返りについてみなさんに聞きたいことがあるので、協力をお願いします。

1. 振り返りを書くことは

ア とても意味・効果のあることだと思う
イ 意味・効果のあることだと思う

ウ あまり意味・効果があると思わない
エ 意味・効果があると思えない

2. 1番でアもしくはイと答えた人は答えてください。
振り返りにどのような意味・効果があると考えていますか。

3. 1番でアもしくはイと答えた人は答えてください。
振り返りを書くときに意識していることは何ですか。良い振り返りはどんな振り返りだと思いますか。

4. 1番でウもしくはエと答えた人は答えてください。
振り返りに意味・効果を感じないということについて、

①十分に振り返りをしていると思うが意味・効果を感じない
②振り返りを何をどう書けばよいかわからない
③その他 ()

5. 4番で①と答えた人は答えてください。
こうすれば意味・効果がある振り返りになると思う方法ややり方はありますか。

6. 4番で②と答えた人は答えてください。
こうしてくれば振り返りが書きやすくなるのに、と思うことは何かありますか。

図1 学習者に行ったアンケート

アンケートではまず、振り返りを書くことに意味・効果を感じているかどうかを確認した。その結果、意味・効果があると感じている学習者には、どのような意味・効果があると思うか、振り返りを書くときに意識していることは何かを問うた。また、意味・効果があると感じていない学

習者には、意味・効果が感じられないと思う理由、振り返りを書くために求める手立てを問うた。

これは、質の高い振り返りを書くことができていない学習者は意味・効果を感じているのに対し、質の高い振り返りを書くことができていない学習者は意味・効果を感じていない学習者が多いのではないかと考えたからである。また、振り返りを書くことに意味・効果を感じないから書かないのか、それとも書き方が分からないから書けないのかを確認するねらいもあった。

回答結果は62名中15名が「とても意味・効果のあることだと思う」、38名が「意味・効果のあることだと思う」、9名が「あまり意味・効果があると思わない」であった。

この結果において、まず、「あまり意味・効果があると思わない」と回答した9名に着目した。この9名のうち、8名が振り返りに意味・効果を感じないということについて、何をどう書けばよいか分からないと答えている。このことから、振り返りについて意味・効果があると感じていないから書いていないのではなく、書き方が分からなくて振り返りを書くことができていないから意味・効果を感じることができていないのだとわかる。

また、意味・効果があると回答した学習者に着目しても、どのような意味・効果があると思うかについて、学びや経験について再確認や整理することができるといった回答が見られた一方、自分の考えをまとめる力がつく、長い分掌を書く力がつくといった回答も見られた。つまり、内省することの意味・効果ではなく、書くことに注目しており、振り返りが本来求める意味・効果を十分に理解できていない学習者がいることが明らかになった。さらに、振り返りを書くときに意識していることや良い振り返りはどのようなものだと思うかについては、わかりやすさや授業内容のまとめといった回答が多くあり、どのように振り返ると良いかについてあまり理解がされていないことがわかった。

これらのことを受け、振り返りをするための正しい意味・効果について理解させたいうえで、どのように振り返ると良いかを指導していく必要があることが捉えられた。

3.3 振り返り指導の在り方

本節では振り返り指導の在り方について考察を進める。前節の内容を受けて、振り返りの意味・効果について正し

く理解させること、どのように振り返るとよいかを指導していくことについて、何をすべきであるかを論じる。

振り返りの意味・効果について正しく理解させるために何をすべきか。それは、振り返りの意味・効果について指導者が学習者にきちんと伝えることである。振り返りという手法を用いることの大切さだけが広まり、振り返りをするのが目的になってしまったり、指導者にとって振り返りをするのが当たり前かようになってしまったりしている部分があり、なぜ振り返りをするべきなのかをきちんと伝えることができていないように感じる。

小林は「自分がどこまで学び、どこからまだわかっていないのか、その学びは自分にとってどういう意味があるのか、自分の中にある新たな問いを自覚できる人間は、自律的に深く学び続けることができる」と述べている（小林2019 p.61）。振り返りをするすることで、自分の課題を認識したり、自分の思考の流れを把握したりすることで次に生かすことができるようになること、経験と学びのつながりを自覚し、言語化することで整理・体系化できることなど、振り返りで学ぶ力を高められることを学習者に伝えていくことが大切である。また、年度初めの時期に伝えるだけでなく、ことあるごとにその重要性を伝え、学習者が振り返りの経験を積み重ねることによってその重要性を実感することが望ましい。

また、どのように振り返るとよいかを指導するためには、次の三つの手立てが重要であると考えられる。

一つ目は、良い振り返りのモデルを示すことである。どのようなことを振り返ることができていけばよいのかを理解させるためにはモデルを示すことが有効である。指導者が作成したものや学習者の優れた振り返りを共有し、良い振り返りとはどのような振り返りであるのかのイメージを持たせる。

二つ目は、指導者がフィードバックを与えることである。自分が行った振り返りは良い振り返りであるのかを学習者が把握するためには、指導者の評価が必要不可欠である。また、評価をつけるだけでなく、コメントでさらに振り返りを深めてほしいところや不足している視点について指摘することで、学習者が振り返りを深められるようにしたい。このような経験を学習者が積み重ねることで振り返る力が高まっていくと考える。

三つ目は、振り返る観点を示すことである。どのような

観点で振り返りを行うべきかを考えることは学習者に求める必要がないものである。必要な観点に沿って、どのような振り返りを行うことができたが大切である。特に、振り返りに慣れていない、どのように振り返ればよいかがかかっていない段階においては積極的に指導者が振り返る観点を提示してやる必要がある。振り返る経験を積み、振り返る力が高まれば観点を示さないことも考えられるが、まずは観点を示して振り返らせることから始めたい。

なお、この三点を実行するためには、指導者自身が質の高い振り返りがどのようなものであるかを具体的に把握しておく必要があることを補足しておく。学習者にアンケートを行う前にモデルを示し、フィードバックを与えていてもその効果が薄かったのは、指導者が持つ質の高い振り返りの規準が明確になっていなかったことだと考えている。

また、上記の三点以外にも、書くことが苦手な振り返りができない学習者がいることも想定し、その負担を少しでも軽減するため、話すことによる振り返りを取り入れることも場合によっては必要である。書いて表現する力と振り返る力は別のものであるため、振り返りができているかを正しく評価してやるためにも、話すことによる振り返りも取り入れたい。

さらに、本稿では単元を通した振り返りを想定しているが、単元の途中で振り返りを取り入れたり、振り返りという形でなくても自分の思考をメモさせたりすることも大切な視点である。どのような見通しを持って言語活動に取り組んだか、どのようなところで悩んでどのような判断を下したか、は単元の最後では十分に振り返ることができない可能性もあるからである。

以上のことを踏まえ、話をさせることやメモをとらせることなど十分な振り返りができるための工夫を取り入れつつ、モデルを示して良い振り返りのイメージを持たせたい。観点を示して振り返る内容を焦点化させ、フィードバックを与えることでその質を高めていくことが、振り返りを指導するために必要であるとまとめられる。

4 考察

本稿では、「主体的に学習に取り組む態度」を評価する方法が明確になっておらず、また、現状ではその育成ができていないという問題意識を踏まえ、「主体的に学習に取り組

む態度」を評価していく材料として振り返りを取り入れることで、評価の方法を明確にし、さらに「主体的に学習に取り組む態度」を育成することができるのではないかについて、考察を進めてきた。

先行研究をもとに、国語科における質の高い振り返りには、言語活動に関する振り返りと資質・能力に関する振り返りの二つが必要であることがわかった。また、それぞれの観点を具体化した結果、振り返りが「主体的に学習に取り組む態度」を評価する材料として適切であると判断することもできた。そして、その評価方法についてもループブックを用いて具体化することが有効であるという見通しをもつことができた。

さらに、学習者に行ったアンケートの結果から学習者に質の高い振り返りを行わせるために必要な指導についてまとめることができた。

ただし、今回まとめた指導によって学習者の振り返りの質が高まるかについてはまだ授業実践が少なく、検証が十分ではない。

今回まとめた内容を今後に生かし、学習者が主体的に学習に取り組み、より深い学びに到達できるようにするため、振り返り指導の在り方について、今後も研究していきたい。

参考文献・引用文献

- 文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』解説国語編 東洋館出版
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2020) 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 国語】』 東洋館出版
- 生井裕子・中島久樹・山下徹 (2019) 「小学生の「振り返りの質」を高める実践及びその評価—リフレクションワークと概念型指導—」 『清泉女学院大学人間学部研究紀要』 第 19 号 p.3
- 梶浦真 (2022) 『アクティブ・ラーニング時代の「振り返り指導」入門—目的を持ち学び続ける子どもを育てる授業づくり』 教育報道出版社
- 梶浦真著・小林和雄編 (2021) 『すべての子どもを深い学びに導く『振り返り指導』—自律的で深く学び続ける力を育てる振り返り指導—』 教育報道出版社
- 梶浦真著・小林和雄編 (2021) 『〈主体的・対話的で深い

学びを実現する〈【振り返り指導】の基礎知識—質の高い授業づくりを支える理論と実践<Ver1.7』—』
教育報道出版社

北村凌（2022） 「国語科の学習における主体的な迫及を促す課題設定の在り方」 『わかやま子ども学総合研究センタージャーナル』 第3号 pp.19-26-

小林和雄（2019） 『改訂版 真正の深い学びへの誘い「対話指導」と「振り返り指導」から始める授業づくり』 晃洋書房

増見敦（2022） 「「主体的に学習に取り組む態度」の見取りと評価：英語科言語活動の「振り返り」指導の経過と課題」 『神戸大学附属中等論集』 第6号 pp.24-25